

Charles Baker: *William Faulkner's Postcolonial South*

New York: Peter Lang, 2000. x+156 pp.

森 有礼

文学研究においてポストコロニализムが「市民権」を得て久しいが、この用語がフォークナーの名と共に用いられたのは、恐らく本書が最初であろう。同時に、このタイトルの「ポストコロニアルな南部」という表現に当惑するフォークナー研究者も多いに違いない。今やフォークナーを論じる際には人種、性差、階級というこれまで流行の主題が殆ど不可避かつ不可欠であるにも関わらず、ごく一部の例外を除いて、これまでフォークナーがポストコロニアルな視点から扱われることはなかった。ひと言で言えばその理由は、フォークナー作品の主たる舞台である南部が、Bill Ashcroft 達の言うポストコロニアル経験、即ち「帝国主義のプロセスにさらされてきた文化」を持つと見做されなかつたからであろう。

だが本書も指摘するように、20世紀前半の所謂「サザン・ルネッサンス」が、南北戦争の敗北からの文化的復興を果たそうとする南部の文学的失地回復運動であった事実を見る限り、こうした理解は正しくない。本書の最大の特長は、フォークナーブリティにおける従来の常套句であった、南北戦争後の所謂「再建期」以降の北部と南部の対立を、前者による後者の「帝国主義的侵略」によるものとして捉え直した点である。こうした事実は既に Edmund Wilson が指摘するところではあるが、本書はもう一步踏み込んで、白人支配階級の男性としてだけでなく、北部に抑圧されたサバランとしての南部の白人について書くフォークナーの意義に目を向けている。本書は現代文学理論を用いて19世紀後半以降の小説家、特にマイノリティ作家の発掘や正典的作家の批評的再評価を

目指した、Kent State University の米文学者 Yoshinobu Hakutani 監修の “Modern American Literature”シリーズの一つであるが、その意味ではシリーズの趣旨に適う新たなフォークナー研究の方向性を打ち出していると言えよう。

著者のベイカーはフォークナーを専門とし、現在はハクトニと同じケント州立大で教鞭を執っている（本書出版時は Indiana University of Pennsylvania 助教授）が、本書ではフォークナーを W. B. Yeats, Sean O'Casey, Jean Rhys, Chinua Achebe, Ngugi wa Thiong'o, Salman Rushdie など、今や代表的とも言えるポストコロニアルの作家と並べて論じており、この主題に対する著者の広範な知識と深い関心を窺わせる。

本書の目的は、南北戦争以降の南部の歴史を、北部による「植民地化」の経験とその克服の過程と見做すことで、フォークナーを「ポストコロニアルの作家」として再定義することである。序論と結論を含めて全部で七章からなる本書は、こうした試みの中で従来の「ポストコロニアル的状況」の定義についても、よかれ悪しかれ新たな見地を提供している。

第一章では、植民地に「他者」のイメージを投影する帝国主義の眼差しは、人種、民族及び国境に基づくのではなく、大英帝国によるアイルランドの植民地化の例に明らかなように、本質的に“*intra-national*”(17)なものであることが指摘される。この文脈の中で、南北戦争後の「再建期」以降新南部が被った政治的・経済的改革という「植民地化」を通じて、かつての支配階級であった南部人はサバルタン——“*dispossessed, second-rated citizens in their own land*”(24)——として捉え直される。この経験は南部人にとって筆舌に尽くし難いものではあるが、そこから南部のアイデンティティを再構築しようとする作家達の試みを通じて、南部にポストコロニアル文学が生まれるとベイカーは主張する。

第二章では、著者はリース、ラシュディ及びアチェベの作品に言及しつつ、植民地化以前の国家や民族の過去を神話化し、或いは植民地体験の中に「苦難を通じた救済 (salvation through suffering)」(8)の可能性を探るポストコロニアル文学の特徴が指摘される。植民地経験によって改変されまた失われた過去

に対する、自らの物語/歴史の必要性、「自分達の声」を回復することの必要性がポストコロニアル文学の原点であると共に、サザン・ルネッサンスもまたこうした「声」の回復を求める運動であったことが確認される。

第三章以降では、フォークナーにおけるこうしたポストコロニアル文学の実践を、他のポストコロニアル作家の作品と比較しつつ、具体的に辿ってゆく。まず第三章ではアチャベやイエイツと比較しつつ、フォークナーの *Flags in the Dust* や *Absalom, Absalom!* が採り上げられる。ペイカーによれば、作家が物語る植民地時代以前の英雄譚、つまり自分達の「聖なる歴史を語る絶対的真実としての神話」(56)は、植民地経験によって失われた過去を回復し自己の文化を再強化する機能を果たす。そうした例が、アチャベやイエイツに見られる神話的英雄像であり、また *Flags*において現在を生きる登場人物を縛る、南部の過去と伝統である。同時にペイカーは *Absalom, Absalom!* を南部の興亡の神話と見做し、それが南北戦争敗北の原因の象徴を見る。無論この神話は南北戦争後の南部の損なわれたアイデンティティを再構築すると共に、南部没落の原因が奴隸制に基づくプランテーション貴族制に内在的なもの (*Absalom* の中の表現を用いれば「神の呪い」) であることを暗示する点において多分に両義的ではあるが、その必然性は次章で弁証法的に説明付けられる。

第四章では、*Requiem for a Nun* や *Light in August* などに見られる苦難と救済の主題が扱われる。ケニア独立の史実に取材したジオンゴの *A Grain of Wheat* を参照しつつ、著者は *Requiem* のヒロイン Temple Drake の墮落と、彼女の子供を殺害する乳母 Nancy の処刑の甘受の意味について考察する。そこにうかがえるキリスト教的な苦難と救済のプロットについて著者は、「我々は自分の過ちを認めること (culpability) を通じてしか、歴史を超えて明日へ進むことはできない」(88)と述べるが、そのためにはスケープゴートが不可欠である。*Requiem* の Nancy や *Grain* の Kihika 以外に著者が挙げる例は、*Light in August* の Joe と *The Sound and the Fury* の Quentin である。彼らは皆共同体を救うべく、自身に降りかかる理不尽な苦難を耐え忍ぶ (endure) が、彼らを通じて、サバルタンはその苦難に満ちた植民地経験を耐え、救済を待ち続けることができるのであり、その意味でこれらの作品は等しくポストコロニアル的

であると著者は論じる。

第五章は本書の実質的な結論部である。ポストコロニアル文学の特徴を、著者は Michael Harris の言葉を借りて “a paradoxical hope for the future”(186) と指摘し、こうした逆説的な樂觀性の特徴を、*The Unvanquished* の Bayard, *Go Gown, Moses* の Ike, そして *The Snopes Trilogy* の Eck に窺える「惡の内在的自己破壊性」、「登場人物に与えられるやり直しの機会」、「主人公の堅忍 (perseverance) と善性によって人間が生き延びること (preservation of the species) が保証されること」(105) の三点に帰する。これらの前提を確信し、そのために作品を創作し続けることで、フォークナーを含むポストコロニアルの作家—サバルタンーは、過去の暗い遺産を克服する試みを続けることができる、というのが著者ベイカーの結論である。

本書の特徴は、まず南部の、特に貴族階級に属する白人を、ポストコロニアルな存在として新たに定義した点であろう。冒頭でも述べたが、南北戦争後の南部を北部の帝国主義的支配という枠組で捉え直す試みは、従来南部白人貴族にとって大きなディレンマであった、奴隸制における加害者としての罪悪感と、彼ら自身が感じずにはいられなかった屈辱的な被害者意識との両立を可能にする。ベイカーの提示するこうした概念は、北部の資本的、政治的な圧力のみならず、アメリカ世論が南部に対して持つ圧倒的な道徳的压力に対して、南部が自らの「植民地経験」を語る声を上げる理論的可能性をもたらすのである。

同時にこうした定義は、ポストコロニアルな主体の本質的多義性への理解を深める。第二章でベイカーは、リースの *Wide Sargasso Sea* の、ドミニカでは英国人地主として、また英国では混血のクレオールとして共に疎外されるヒロイシ Antoinette の例を挙げて、彼女は「エリートとサバルタンの両方の立場にあり、それは彼女を定義する側の視点に左右される」(42) と述べているが、主体の本質的な相対性に関するこの指摘は、主体の自己に対する根本的な無力さを明らかにする。この主題は、*Light in August* の主人公ジョーが経験した、人種的アイデンティティの曖昧さの問題を経て、南部において白人であることの複雑さについての問い合わせともなっているように思われる。

こうした指摘は、ポストコロニアルな主体の地理的もしくは人種的・民族的

特性のみならず、そのメタフォリカルな本質をも明らかにする。このメタファーとしての主体をどう処するかという点に、文学がポストコロニアルな状況を扱うことの意義があるようと思える。

最後にベイカーの議論に対する疑問であるが、評者の見る限り、ベイカーの言うサバルタンとはあくまで比喩的存在であり、常に他者との関係によってしか規定し得ない相対的なものである。極めて単純な疑問ではあるが、ある主体が、他者との特定の関係性において、同じようなサバルタン的立場に立ち得るという理論的可能性をもって、さまざまに異なる立場の人間が、それぞれの歴史的、社会的背景を越えてサバルタンであると断じることは、本当に可能なのだろうか。言い換えれば、アイルランド、ナイジェリア、ドミニカ、ケニア、インドと、さまざまな国や時代において、宗主国との複雑な関係を持ち続けてきた作家達の経験は、本当に南北戦争後の南部の白人（黒人ではなく）のそれと共に通項を持ち得ると考えてよいものであろうか。

例えば以下のようなベイカーの言明に対して、評者は強い違和感を持たざるを得ない。南部の黒人や女性の立場に一定の留保を置きつつも、本論の結論で（白人で男性の）南部人は「北部の白人男性に対しては……上から押し付けられた帝国主義の犠牲者同様に二級市民だと感じた」と述べるベイカーは、「こうした南部の白人男性の中には、彼らの凋落した状況を、自身が虐げることのできる人々、つまり黒人と女性への支配を強めることで補償しようとした者もいた」(131)と論じる。だが、例えばジム・クロウ法をそうした南部白人の「補償行為」として捉えることが仮に可能であったとしても、ベイカーが述べるようなこうした責任/原因の無限後退は、南部の奴隸制や人種差別の責任の所在を再び曖昧化させる結果となつてはいないだろうか。

もう一つは、ベイカーの余りに「楽観的」なポストコロニアル文学観に対する懷疑である。未来における生の改善を確信する彼の主張が、ノーベル賞スピーチでのフォークナーの有名な結語（“The poet's voice need not merely be the record of man, it can be one of the props, the pillars to help him endure and prevail”[724]）を意識しているのは一目瞭然である。またポストコロニアル的主体にとって、過去の歴史を補償し、未来への展望を提示する物語が必要である

ことに異存はない。だが、同時にそれが、まさにその「来るべき未来」という物語的幻想をもって数多のサバルタン的主体に、殊に南部白人男性によって依然として声を奪われたまま取り残されている黒人や女性に、さらなる忍従を強いることになりはしまいか。ベイカーはフォークナー作品の中で繰り返される過去の克服の失敗を、「普遍的な不毛さの印ではなく、個人の限界の問題」(127)に帰しているが、我々一人ひとりがつまるところ個人としての限界を超えることができない以上、こうした「歴史の他者」としての未来を前提とした議論が、本当に個々のポストコロニアル的状況と確かに切り結ぶことができるかはかなり疑わしい。既に Lawrence H. Schwartz が、フォークナーの批評的評価と、冷戦期の自由主義陣営のイデオロギー的状況との共謀関係について喝破している以上、そして文字通りベイカーの議論もこうしたイデオロギー的意図を踏まえて展開している以上、今あえてこの種の主張を行う新たな理論的根拠についても示してほしかったところである。

引用文献

- Ashcroft, Bill, Gareth Griffiths, Helen Tiffin. *The Empire Writes Back: Theory and Practice in Post-colonial Literatures*. London: Routledge, 1989.
- Faulkner, William. "Address upon Receiving the Nobel Prize for Literature." Ed. Malcolm Cowley. *The Portable Faulkner*. 1946. Revised ed. New York: Penguin, 1977. 723-24.
- Harris, Michael. *Outsiders and Insiders: Perspectives of Third World Culture in British and Post-colonial Fiction*. New York: Peter Lang, 1992.
- Schwartz, Lawrence H. *Creating Faulkner's Reputation: The Politics of Modern Literary Criticism*. Knoxville: U of Tennessee P, 1988.
- Wilson, Edmund. *The Patriotic Gore: Studies in the Literature of the American Civil War*. New York: Noonday P, 1962.